

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

世界の見方

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 放送大学教育振興会 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇田川, 妙子 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10502/00008561 |

世界の見方

宇田川妙子

本章のねらい：私たちは、現実をそのままの形で見ていると思っているかもしれないが、決してそうではない。それぞれの社会文化には、自分たちを取り囲む世界をどのように認識しているか、という認識の仕方がそれぞれに存在する。ここで言う世界とは、人だけでなく、自然や宇宙、超自然的な神や霊、死後の世界、そして過去や未来など、あらゆるものを含んでいる。そして、それらをどのように意味付けるかが、「世界の見方」、すなわち世界観である。私たちは、この世界観を通して、それぞれの現実を見ているのである。

ところで、この世界観が最も凝縮した形で蓄積され表出されている領域が、宗教である。もちろん、宗教だけが「世界の見方」を規定しているわけではない。しかし、宗教がこれから見ていくように、「世界観に最も深く関わっている領域の1つであることは間違いない。ゆえに本章は、宗教を足がかりにしながら、「世界の見方」という問題の一端を考えていくことにする。

<キーワード> 現実, 世界観, 宗教, 日常と非日常, 象徴, 儀礼

1. 宗教の多様性と共通性

まず、宗教とは、きわめて多様であり、さらには広範囲にわたる行為や現象を含んでいることを確認しておこう。

一口に宗教と言っても、キリスト教、イスラーム、仏教などのように

世界的な広がりをもつ世界宗教と言われるものから、日本の神道のように地域限定的な宗教、すなわち民族宗教とも言われるものなど、その規模や性格は多様である。一神教や多神教という区分もある。また、民間信仰などのように、明確な教義や教団組織がなくとも、さまざまな超自然的な存在が信じられていたり儀礼が行われていたりすることも少なくない。人類学では、それらも宗教というカテゴリーに含めており、アニミズム、呪術、妖術、シャーマニズムなど、さまざまな信仰のあり方がすでに数多く議論されているが、ここでは触れない。

またさらには、どの社会文化でも複数の宗教や信仰が存在し、互いに影響し合ったり葛藤したり、あるいは、さまざまな形で住み分けて共存していることにも注意する必要がある。日本でも、仏教と神道が場面で使い分けられていると同時に、さまざまな民間信仰が見られるし、キリスト教などの他の世界宗教も入り込み、新興宗教も少なくない。この意味でも、宗教とはきわめて多様で複雑な領域なのである。

しかし本章で注目したいのは、こうした多様さの一方で、ほぼどんな宗教にも、ある類似点・共通点が見られるという点である。たとえば、どの宗教にも年中行事や人生儀礼がある。これは裏を返せば、どの宗教も、具体的な形はどうかであれ、人生や時間にさまざまな意味付けをして節目をつけるという機能をもっていることを示している。

また、いずれの宗教においても、その具体的な信仰や儀礼は、その内容、儀礼が行われる場所や時間など、さまざまな「象徴」から成り立っていることにも注目したい。

ここで若干、象徴について説明をしておくと、きわめて単純化した言い方だが、あるものが、それ自体とは別の何かを意味するとき、そのあるものが象徴であり、別の何か、その象徴の意味ということになる。たとえば赤という色は、色の種類であるだけでなく、血や情熱などの意

味や、赤信号などのように警戒などの意味を持つことがあるが、このとき赤は、血、情熱、警戒などの象徴になっているのである。

そして象徴とは、それぞれが単独で意味を持っているように見えても、他の象徴との関連の中に位置付けられており、本質的にはそうした関連の中で意味を表出しているという点にも注意したい。たとえば白と黒は、それぞれ清浄と不吉の象徴になることが多いが、実はその意味は、この2つの色の対照・対立の中でこそ明確に浮かび上がってくるものである。ゆえに、同じ白や黒であっても、他の色と関連付けられたときには別の意味を表すこともある。

こうして見ると私たちは、世界をそうした象徴群が作り出している関係の網の目を通して見ていると言えるだろうし、ゆえに、その網の目とは、まさにそれぞれの社会文化における世界の認識の仕方、すなわち秩序であるとも言換えられる。そして宗教とは、こうした象徴の体系を、信仰や儀礼などの形を通して、最も豊かな形で表出している領域なのである。

また、だからこそ宗教は、それぞれの社会文化の秩序に沿って多様な形で出現しているわけだが、その一方で、そもそも象徴や秩序がいかに作られるかという、より根源的な次元においては、類似性が見られるというのが3点目である。実際、新年の儀礼はどこでも行われていることは先に述べたが、とするならば、どの社会文化でも、新年という考え方、つまり毎年、時間が1年というサイクルで新たに生まれ代わるという時間観は共通していることになるだろう。

さらに、聖と俗、あるいは、非日常と日常を区別するという考え方も、どの宗教にもある。たとえば日本の神社を見てみると、その入り口には手と口を水ですすぐ場所があるが、これは神社が身を清めて入るべき場所、すなわち聖なる場所であることを示している。どの社会文化でも、

こうした日常とは異なる領域が存在しており、それらは宗教的な意味をもつとされているのである。

2. 象徴と秩序

1) 象徴的二元論

では、具体的な象徴のあり方は個々の社会文化によってさまざまであるにもかかわらず、そこに、ある種の類似性が見られるとは、どういうことなのか。

そもそも私たちが物事を秩序付けて理解するということは、区別することであり、その最も基本的なやり方は、2つに区別する方法である。実際、世界のさまざまな文化社会においては、物事を2つの対立項に区別して秩序化する方法は広く見られる。そうした2分法は、象徴的2元論、または2元的象徴分類体系という言葉で呼ばれる。

この2元論は、『右手の優越』の著者であるエルツによって広く知られるようになった。彼は、インドネシアのダヤクや、ニュージーランドのマオリなどの社会において、右手が清浄で聖なる位置付けにある一方、左手は不浄で悪いイメージを付与されていることに注目し、そうした一連の2項対立の組み合わせが世界各地にあると主張したのである。この対立は、右／左、優／劣のみならず、男／女、上／下、清浄／不浄、吉／凶、昼／夜、天／地、生／死などの対立にも関連し、それ全体が1つの体系をなしている場合も少なくない。日本でも、左遷や左前など、左がつく言葉は否定的な意味が多い。かつては、子どもが左利きの場合、なんとなく不吉などという理由から右利きに矯正されることがしばしばあった。また、インドネシアなどでは、食事のときには右手を使い、排泄時には左手を使うという習慣があったと言う。

ただし、これはあくまでも、2項対立的な考え方そのものの普遍性で

あって、その具体的な内容は、どの社会文化においても当てはまるわけではない。ときには逆転することもある。また、右／左という対立だけでなく、熱い／冷たいなどの対立もある。この対立図式がよく見られる中南米などでは、身体の状態や部位、食物や薬草などが、熱い／冷たいの2項に振り分けて認識されており、物事はこの2つのバランスから成り立っていると考えられている。このため病気になると、冷たい病気には熱い薬草が処方されるなど、このバランスを回復することが治療であるとされる。そして、もちろん2分法だけでなく、3分法や4分法という分類体系をもつ社会文化も少なくなく、とくに東西南北という方位を用いた4分法は、世界各地に存在する。

2) 聖と俗、非日常と日常

また、聖と俗という区分も重要である。先述の神社の事例のように、どの社会文化でも、聖なるものとは、その社会において特別な意味を持ち、タブー*1などによって俗なるものから厳しく区別され、それこそが宗教と深い関わりをもっていると主張したのは、デュルケームである。ゆえに聖の領域とは、日常とは一線を画した非日常の領域であると言い換えることもできる。日本にも、日常の俗なる領域を表す「ケ」という言葉に対して、非日常を意味する「ハレ」という言葉があり、両者の対立は明確に意識されている。

ただし、ここで注意したいのは、この聖なる非日常のものとは、神や仏のようにプラスの力ばかりでなく、悪魔や鬼のようにマイナスの力やイメージをもつことも少なくないという点である。日本でも、「ハレ」や「ケ」の他に「ケガレ」という言葉がある。「ケガレ」には、たとえば「死のケガレ」のようにしばしばさまざまなタブーが付きまとい、それが、日常の領域に属する事象ではないことは明らかである。しかし、だ

*1 タブー（禁忌）とは、ある事象が危険な力を帯びていると見なされ、それへの接触等の行為が禁じられること。その禁止事項をおかすと災厄が降りかかると信じられている。

からと言ってプラスの意味が付与されているのではなく、むしろ私たちに害を及ぼすマイナスの力の領域と見なされている。つまり、聖の領域、非日常的な領域とは、あくまでも日常でないという意味であって、その中身はプラス・マイナス、吉・凶の両方の側面をもっているのである。

3) 秩序から外れたもの

ところで、こうした秩序化とは、混沌とした現実には、認識の仕方という枠をはめることになるわけだから、その秩序から外れるもの、つまりその枠に沿っては認識しにくいものも当然出てくる。そして実は、この秩序から外れて分類できないもの、曖昧なものも、宗教的に重要な意味をもっている場合が少なくない。

ダグラスによると、そもそも私たちが汚いと感じたり危険視したりするのは、物事があるべきところがない場合であると言う。たとえば、なぜ私たちは髪の毛が落ちてると汚いと感じるのか。それは、髪の毛は頭についているべきものだから、床に落ちた途端、つまり、あるべきところから外れると、途端に汚く感じてしまうという説明である。また、ヨーロッパではタコを食べるのを嫌うというタブーがよく知られているが、これには旧約聖書の世界観が関わっている。旧約聖書では、自然は空と地上と海の3つに分類され、そこに住む動物も、鳥、獣、魚に区分されている。つまり、この分類によると、海は鱗のある魚のすみかである。にもかかわらず、タコは鱗をもたないばかりか、足があるように見えるため、この分類に当てはまらずにタブーの対象になってしまうのである。蛇についても、地上に住む獣は4つ足であるはずなのに、蛇には足がなく、しかも海の動物と同様に鱗があるため、秩序外の存在として神話などでしばしば悪者扱いされていると見なすことができるだろう。

こうした秩序から外れたものとは、両義性という言葉で説明されるこ

ともあるが、ここでそのあり方を簡単に整理してみると、①2つ以上の領域にまたがるもの、②どの領域にも当てはまらないもの、③ある領域に入っているが、その周辺や境界線上に位置付けられるもの、などを挙げるができる。私たちは、物事とは、それぞれの秩序に沿ってあるべきところにあるはずだと考えている、ゆえに、その秩序から外れた存在は、秩序を攪乱して日常を超える力、すなわち非日常の力をもつとされ、危険視されたり、時には崇拜の対象になっていることは、私たちの身の回りにも多々見ることができるだろう。たとえば、日本では「狐の嫁入り」とも言われる天気雨は、多くの社会で不吉な前兆、または逆に吉兆とされているが、それは、晴れているのに雨という、まさに両義的な天候ゆえである。このほかにも、幽霊が出やすいと言われている場所や時間（川岸、橋、トンネル、丑三つ刻、「逢魔ヶ刻」など）を見ていくと、それらは多くの場合、秩序から外れた場所や時間である。

さてこうして見ると、それぞれの社会文化では、以上のような論理のもとで象徴や秩序のシステムを作り上げ、それを通してそれぞれの宗教を形作ってきていることが少しずつ浮かび上がってきただろうが、その様子は、とくに儀礼という場に顕著に表れている。儀礼とは、神話や教義が宗教の言語的な側面であるとすれば、その行為的な側面である。したがって最後に、儀礼という場から、これまで述べてきたことをもう一度振り返ってみることにしよう。

3. 儀礼

1) 通過儀礼

一言で儀礼とは言ってもさまざまなものがあり、その分類の仕方も多様だが、最も簡単な分類の仕方は、①年中行事：1年を1つのサイクルとして、その節目ごとに行う儀礼（新年儀礼や春祭り、農耕儀礼なども

含む)、②人生儀礼：人生を1つのサイクルとして、誕生、成人、結婚、死などの節目ごとに行う儀礼、③状況儀礼：雨乞いや治療儀礼など、その時々にかかる状況に合わせて行われる儀礼（ゆえに事実上、上記2つ以外のすべての儀礼が含まれる）の3つに分けるものである。

ところで儀礼は、このように多様ではあるが、実は本質的には同じ構造をもっていると指摘したのは、ファン・ヘネップである。彼は、主に人生儀礼を題材にして「通過儀礼」という概念を提示した。通過儀礼とは、ある状態・段階から、他の状態・段階へと通過・移行する際に行われる儀礼という意味である。たとえば成人式は、子どもから大人への移行であり、結婚式は、未婚から既婚へと移行するための儀礼である。人生儀礼は、それが人生の節目ごとに行われる儀礼である以上、すべて通過儀礼と見なすことができる。

そしてファン・ヘネップはさらに、通過儀礼とは、それぞれ1つの儀礼が3つの段階、すなわち①分離の段階、②移行の段階、③統合の段階から成り立っていると指摘した。分離とは、ある状態から次の状態に移る際に、まずは彼または彼女を現在の状態から引き離すための段階である。そして、新しい状態にふさわしい知識や資格を得るための移行の段階を経て、最後に、当人を新しい状態になった者としてあらためて社会に統合する儀礼が行われ、儀礼全体が終了する。たとえば、成人式を見てみよう。

2) 成人式の構造

成人式とは、子どもから大人になるための儀礼だが、大人になるとは、社会の正式かつ責任ある成員になることを意味するため、いわゆる伝統的な社会においては、社会全体の最大の関心事であった。ゆえに、成人式が数か月続くという社会もあり、その場合には、成人式は毎年ではな

く、数年に1回まとめて行われることも少なくなかった。

さて成人式は、まず子ども*2を、それまで育ってきた場所から象徴的に引き離す儀礼から始まることが多い。その際、祖先の霊をかたどった仮面をつけた男たちが、子どもを母親の手から奪い取って、儀礼の行われる場所へと連れ去るという行為が儀礼的に演じられる社会もある。

そして子どもたちは、特別に作られた小屋や森の中など、日常生活から隔離された場所で、大人になるためのさまざまな儀礼を受けることになる。具体的には、これまで知らされていなかった神話、歴史、儀礼のための歌や踊りなどを学んだり、入れ墨や割礼など、それぞれの社会文化で大人の印とされている身体加工が施される場合もある。さらには、さまざまな試練を受けることもあり、たとえば、日本で現在レジャーにもなっているバンジー・ジャンプはその1つである。これは、もともとメラネシアのバヌアツで行われていた成人式の一部、すなわち、これを経て生き残ったものだけが大人の資格を得るという試練であった。

これらの移行段階が終了し、大人としての準備が整うと、次は、大人として社会に戻り、社会に迎え入れられるという最後の段階になる。このとき、たとえばコンゴのピラという社会では、最終日に子どもたちが、死者を意味する白い土を身体中に付けて村に現れ、その後、白い土を洗い落とし、大人として生まれ変わったことを示すという儀礼が行われていた。この事例のように、統合の段階ではしばしば、子どもとして死んだ者が、大人として再生するというモチーフが見てとれる。

さて、成人式を事例にして通過儀礼の構造を簡単に述べてきたが、それを図で表すと、図4-1のようになる。またこの図を、先に述べた日常と非日常という区分に注目して見るならば、子どもは日常から分離されて非日常の領域に入り、そこで大人の資格を得て、日常に戻ってくるとも言える。つまり儀礼とは、主に非日常の領域で行われているわけだ

*2 実はすべての子どもが成人式を通過するわけではなく、多くの社会において成人式の対象は男子のみであった。もちろん女子にも、初潮儀礼のように成人女性になる儀礼がある社会は少なくない。しかし、その儀礼はたいいてい家族の内で行われ、村落などの社会全体が参加する儀礼にはならなかった。このことは、かつての多くの社会文化では、男性のみが正式な社会の成員と見なされてきたことと関連していると言われている。

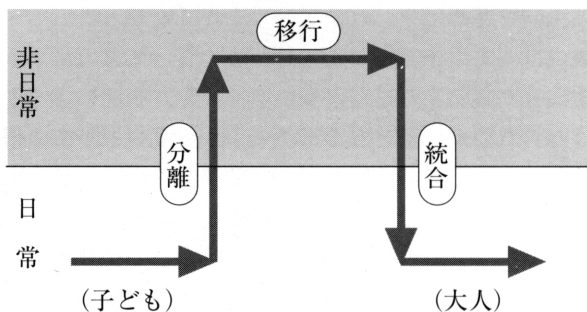


図4-1 通過儀礼の構造

が、それは同時に、日常の断絶・中断としても浮かび上がってくるのである。ここに、子どもはいったん死んで大人として再生するという、死と再生のモチーフが重ね合わせられていることも明らかだろう。

3) 死と再生のモチーフ

以上のような構造は、結婚式など、他の人生儀礼にも当てはまる。とするならば、私たちの人生とは、1本のよどみなく連続した線ではなく、何度かの中断すなわち節目をもち、そのたびごとに死と再生が繰り返されることによって、いくつかの段階を経ていくものと見なされていると言えるだろう*3。私たちは、それぞれの社会文化で、こうした人生儀礼を通して、自分たちの人生のあり方やその時々々の位置を具体的に実感し解釈しているのである。

また、人生儀礼のみならず年中行事や状況儀礼にも、同じ構造が見られることも付け加えておく。ただしそこでは、分離・移行・統合という3段階の構造よりも、日常と非日常、死と再生という側面の方が顕著に表面化していることも少なくない。

たとえば、キリスト教圏では、春に復活祭（イースター）というイエ

*3 この2つの人生観は、さらに時間一般の見方にもつながり、すでにエリアーデらの研究者によって議論されている。すなわち前者のように、時間を同質的で連続的な量としてとらえ、一定方向に流れている線とみなす時間観は「線の時間」という言葉で表されることが多い。一方、後者のように、時間は死と再生を繰り返して断絶しながら流れていくもの、あるいは循環するものであるという時間観は、「円環的時間」と呼ばれる。後者の時間観は、とくに後述の年中行事の中に顕著に見られる。

スの復活を祝う祭りが行われるが、これはもともと春祭りであり、今でもその意味を強くもっている。実際、復活祭と言えば、イースター・エッグと呼ばれる彩色した卵（現在ではチョコレートなどで作ったものが商品化されている）を飾ったり贈り合ったりする習慣があるが、卵が誕生の象徴であることは言うまでもない。つまり、春の誕生という意味である。そして、復活祭の数週間前に行われるカーニバルでは、最終日、カーニバル人形が広場で焼かれるという習慣が見られる地域もあり、中にはこの人形に「冬」という名前が付けられることもある。この2つの祭りをつなげてみると、そこには、冬の死と春の再生というモチーフが浮かび上がってくる。

ここでは紙幅の都合上、これ以上説明を続けることはできないが、新年の儀礼も、古い1年が死んで新しい1年が再生する儀礼であり、また、病気の治療儀礼には、病気である状態から健康な状態へと生まれ変わるための象徴が儀礼のあちこちに埋め込まれている。たとえば、ターナーが著書『儀礼の過程』の中で考察しているザンビアのンデンプ社会における不妊治療儀礼は、その好例である。参照してもらいたい。儀礼とは、その具体的な形や内容はさまざまだが、いずれも基本的には以上のような構造に基づきながら、それぞれの社会の象徴や秩序を表出する装置になっているのである。

さて以上、私たちは、それぞれの社会文化において具体的にはさまざまな形をとりながらも、人生やこの世界、時間や空間などを秩序付けながら生活していることを、宗教という場面を通して見てきた。もちろん、こうした「世界の見方」とは、宗教の領域だけに凝集されているわけではないし、また現代社会では、確かに宗教や儀礼への関心は低くなっている。しかしながら、それらがたとえ形式化し希薄になったとしても、

基本的な考え方そのものは残っている場合も少なくない。私たちは依然として、そうした考え方に基づいて、自分たちなりの「世界の見方」を学び、さらにはそれを解釈し直しつつ再生産し、次の世代へと伝えていっているのである。今回、自分たちの身の回りからもそうした事例を見つけ出し、私たちの「世界の見方」とはどんなものか、あらためて振り返ってみる機会にしてみてもどうか。

●参考文献

- メアリー・ダグラス『汚穢と禁忌』（新装版）思潮社、1995
- ロベール・エルツ『右手の優越』垣内出版、1980（ちくま学芸文庫、2001）
- アルノルト・ファン・ヘネップ『通過儀礼』弘文堂、1977
- 山口昌男『文化と両義性』岩波書店、1975（岩波現代文庫、2000）
- 吉田禎吾『魔性の文化誌』研究社出版、1976（みすずライブラリー、1998）
- ヴィクター・ターナー『儀礼の過程』思索社、1976